

山口義行教授記念号に寄せて

山口義行先生は1974年3月本学経済学部を卒業後、本学経済学研究科に進学され、1978年に経済学研究科後期課程を単位取得退学されました。1994年に経済学部助教授として着任して以来、学部の看板科目である「金融論」を担当され、長年にわたって経済学部の教育と研究を担って来られました。1995～96年度経済学科長に就任された他、会計・金融部会を主導されるなど経済学部の運営にも多大な貢献をされてきました。また、山口先生の研究指導を乞いに院生が集まり、多くの研究者を育成されました。研究者として、数多くの著書・論文を表され、常に学会の中心におられました。

山口先生は、経済学者として理論研究から現状分析・政策提言・企業家支援まで極めて幅広い領域で活躍されてきました。学生・院生時代に三宅義夫教授・久留間健教授の薫陶を受け研究者人生を始められました。不換制度下のもとでの信用理論を発展させ、学界の耳目を引きました。以後も学術論文を次々と発表されました。さらに、日本経済の現状分析に精力的に取り組み、小西一雄教授との共著『ポスト不況の日本経済 停滞から再生への構図』（1994年）は、バブル破裂後の経済不況を専門的水準を下げることなく、明解な表現で分析され、多くの読者を獲得しました。その後、単著として『金融ビッグバンの幻想と現実』（1997年）、『誰のための金融再生か 不良債権処理の非常識』（2002年）、共著として『バブル・リレー 21世紀型世界恐慌をもたらしたもの』（2009年）など、数多くの著書を執筆されました。また、優しい口調で分かりやすいお話は多くの人を魅了し、マスメディアも先生の助言を乞い、多くの番組に出演されました。テレビのレギュラー番組も持たれました。日本経済の現場である中小企業を精力的に訪問し、社長や従業員から直接話を聞き、日本経済が抱える問題や可能性を語って来られました。「金融アセスメント法案」の提案など経済学者として積極的に政策提言をされてきました。さらに、中小企業家をサポートするためにネットワーク「スモールサン」を主宰され、中小企業家の支援に尽力されてきました。まさに、マルチな経済学者として活躍され、立教大学経済学部の名を高めて下さいました。

私が山口先生にはじめてお目にかかったのは、私が1997年4月に本学に着任した時でした。飯島准教授によると、院生にとって、山口先生は「怖い」先生だったといわれますが、私には同僚として、大変気さくに接して下さいました。このため私には「やさしく、ウィットとユーモアを備えた先生」という印象が残っています。1997年当時、新座キャンパスに学部はなく、「新座1日利用」と称して、毎週1日新座キャンパスで授業を実施していました。山口先生と服部正治先生と私は基礎演習を担当していたため新座の講師控室で一緒になりました。そして、山口先生のご提案で、授業終了後、新座キャンパスのテニスコートでテニスを楽しみました。また、しばしば酒席に誘って下さり、旧知の友人のように接して下さいたことは感謝に堪えま

せん。

山口先生の講義は学生に人気があり、私は「学生を惹きつける講義のコツは何か」、先生に伺ったことがありました。その時、先生は「授業のつど「リアクションペーパー（質問票）」を取り、学生の意見を聞きなさい。学生はいろいろと考えながら講義を聞いている。学生が理解できなかつたら、それは教え方の問題です」とおっしゃいました。私は、さっそく「リアクションペーパー」を配り、質問を書かせると、学生たちが実に様々な角度から考えながら授業を聞いていること、また、教師が気づかない些細な用語などで理解できなくなっていることが分かりました。先生は講義が教員の自己満足に陥ることを強く戒め、学生が理解できない講義は意味がないことを私に教えて下さいました。

山口先生は『聞かせる技術』（2008年）を著されましたが、それは人間に対する洞察に富んだ言葉が溢れています。たとえば、先生は聞き手（学生）から見ると教師と「一対一」の関係にあるのだ、講義は常に「一対一」で語りかけるものであると述べておられます。常に学生一人ひとりを尊重し、意識し、語りかけ、聴き手の疑問や意見を捉えることが大切であることを指摘しておられます。学生一人ひとりを尊重し、常に語りあうこと、これは教育・学問の場である大学にとって最も必要な姿勢であります。先生はその姿勢を大学の外でも貫かれました。先生の行く所が“大学”であったともいえます。その意味で先生は全国に“弟子”を作られたといってよいでしょう。

山口先生の長年にわたる本学へのご貢献に感謝し、ここに先生の記念号を刊行させていただきます。

2017年12月

経済学部長 菅沼 隆